

たあらんは、よかりぬべければ、やがてわらはやさぶらふ、螢すこしもとめよかのふみ思ひ出
んと仰らる、殿上わらは、夜ふけぬれば、さぶらはぬうちにも、なかたゞの朝臣、承りたる様ありて、
水のほとり、草のわたりにありき、多くの螢をとらへて、朝服のそでにつゝ、みてもて参りて、くら
き所にたちて、この螢をつゝ、みながら、うそぶく時に、上いとしく御らんじつけて、なほしの御袖
にうつしとりて、つゝ、みかくしてもてまゐり給ひて、内侍のかみのさぶらひ給ふ、几帳のかたび
らをうちかけ給ふに、かの内侍のかみの、ほどちかきに、この螢をさしよせて、つゝ、みながら、うそ
ぶき給へば、さるうすもの、御なほしにぞ、たゞつゝ、まれたれば、残る所なくみゆる、

〔伊勢物語〕^上むかし男有けり、人のむすめのかしづく、いかで此男に物いはんと思ひけり、^{○中時}
はみな月のつごもりいとあつきころほひに、よひはあそびをりて、夜ふけてや、すゞしき風ふ
きけり、ほたるたかうとびあがる、この男見ふせりて、

ゆくほたる雲のうへまでいぬべくは秋風ふくと雁につげこせ、^{○下}

〔大和物語〕^上桂の見こに、式部卿の宮すみ給ける時、その宮にさぶらひけるうなるなん、このおと
こ宮をいとめでたしと思ひかけ奉りけるをも、えしり給はざりけり、ほたるのとびありきける
を、かれとらへてと、此わらはにのたまはせければ、かさみ^{○汗}の袖にほたるをとらへて、つゝ、み
て御覽せさすとて、聞えさせける、^{○歌}

〔源氏物語〕^{二十五}み木丁のかたびらを、ひとへうちかけ給に、あはせて、さむかひかるもの、しそくを
さし出たるかとあきれたり、ほたるをうすきかたに、此夕つかたいとおほくつゝ、みをきて、ひか
りをつゝ、みかくし給へりけるを、さりげなくとかくひきつくろふやうにて、にはかにかくけち
えんにひかれるに、あさましくて、あふぎをさしかくしたまへる、かたはらめいとおかしげなり、
おどろおどろしきひかり見えば、宮ものぞき給ひなん、^{○中}御心ときめさせられ給ひて、えなら